
木山

まーきゅりー

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木山

【Nコード】

N6541L

【作者名】

まーきゅりー

【あらすじ】

あらすじあらあらあら

木山（前書き）

前書きまえまえ

木山

僕、木山修二は今日から高校生になる。僕の成績はまあそれなりに優秀なわけで、地元では誰からも羨まれる名門校に入学する。というのも、昔から友達が少なかった僕が、学校から帰ってやる事といえは勉強くらいしかなかったからだ。そして今こうして、数少ない友達の中でも一番仲が良い、相良一樹と登校している。彼とは小さい頃からよく遊んでいて、いわゆる幼なじみだ。僕の昔の思い出には、必ずといっていい程こいつがいる。こいつはとにかく人当たりがよく誰からも好かれている。明るく、誰にも対しても優しいし、そしてなによりイケメンだった。身長は180センチで八頭身、モデル体型でハーフ顔、スポーツ万能であるイケメンがモテないはずがない。ただ一つの欠点を除いては…

「なあ修二、俺は思うんだよ。宇宙のずっと外には巨人がいて、水槽みたいなもんで人間を飼育してるんだ！いつか俺たち喰われちゃうぞ」

そう。相良一樹はバカなのだ。こんな事をこいつはいつも自慢げに僕に話してくる。

「おはよー！！」

眠気の覚めるような大声に反応して僕らが後ろを向くと、そこにはもう一人の幼なじみの姿があった。彼女の名前は大井実夏。おおいみなつとにかく明るく元気いっぱいのスポーツ少女だ。中学生の時は陸上部に在籍して、県大会でも上位に入賞していた。彼女の髪型はスポーツ少女らしく短めに切りそろえられている。幼なじみであるが、彼女は普通にかわいい。髪の毛を伸ばしたらどうなるか見てみたい気がする。

「お前は、いつでも元気だな。」

「だって今日は入学式だよ。3人とも同じクラスになれたらいいね！。修二もそう思うでしょ？」

「そうだな。お前ら2人いたら賑やかになるだろうな。」

友達が少ない僕にとつて、この2人が同じクラスになったら新しい友達もでき易くなるだろうし、そうなってくれると本当に嬉しい。まあこんな感じで、僕たちはクラス発表をみて教室に入った。そして無事に3人とも同じクラスだったのだが…。机の上に置かれていたネームプレートで確認しながら自分の席を探していた。しかし、僕の席がない。登校時間ギリギリに行つたので、ほとんどの生徒が席に付いていて、もうあまり席が空いていない。それでも見つからなかった。

「ん、きやまき木山茉希？」

空いている席の一つには、木山茉希のネームプレートがあつた。その前の席には一人の女子生徒が座っているが、ネームプレートには木山修二の名前が書かれていた。空いている席ばかりを探していつてわからなかったが、彼女が間違えて僕の席に座っていたのだつた。間違えているよと話しかけて、席を譲ってもらおう。そして入学式当日に、早くも女の子と喋るチャンスがやってきた。なんて浮かれた事を考えていたが、こんな時なんて話しかければいいんだ。まずは自己紹介からしたほうがいいのか、チャラいとか思われないうか。なんて色々悪い事も考えたりはしたが、一応正当な理由があるのだから悪いようには思われないう。こんな僕でも、今までわざと友達を作らなかつたわけではないし、高校生活では友達がたくさん作りたいと思つていた。間違えているよと優しく話しかけてあげれば、好印象を受けてもらえる可能性だつてある。よし優しく親切に、優しく親切だ。僕は精いっぱい優しいさと親切で話しかけた。

「木山さん？」

「嫌だ。」

「えっ??？」

嫌だつてなんだ。この席がそんなに気に入っているのか。まあ確かに、窓際の後ろから2番目のなかなかの席だけだ。

「嫌だ。つて、僕はまだ何も言っていないぞ」

「わかってるわ。私のアドレスが知りたいんでしょ？こんな早いタイミングでアドレスを聞き出そうなんて考えている野獣は、顔を見ればわかるの」

そんなことを木山茉希は、僕の顔も見ないで言った。というかこの状況、絶対にヤバイ。初対面でこんな事を言ってくる女も悪いが、このままだと僕が完全に悪者じゃないか。しかも周りからの視線が痛い。

「いや。そうじゃなくて、木山さん僕の席と間違えてるようなんだけど」

茉希は一瞬焦った仕草でネームプレートを確認して、顔を真っ赤にして僕の顔を見た。

「・・・・・・・・・・」

10秒の沈黙の後、茉希は黙って一つ後ろの自分の席に座った。こいつかなりのドジっ子か。それに勘違いもしてるし。でも、沈黙の時に見た彼女の顔は綺麗に整っていて、目は大きくとてもかわいかった。そんなこともあり、10秒の沈黙が僕には至福の瞬間だった。

入学式が終わり、僕は一樹と実夏の2人と下校中である。まあ当然のように、僕は2人からかわれていた。

「修二が野獣かあ。お前いいあだ名もらったな。俺もそんなかわいいいあだ名が欲しいよ。」

「野獣のどこがかわついいのよ？ それより修二、あんた今まで彼女もできたことないんだからがんばりなよ」

「いきなりあんなこと言ってくる女と付き合えるか！」

まあ確かに見惚れていた事は認めるが、あんな性格の女とは付き合えないだろ。

「大体、一回話しかけただけで付き合うなんて話が飛躍しすぎだろ」

「何言ってるの。ヘタレ素人童貞の修二が入学式にいきなり話しかけたのよ。今日は赤飯炊かなくちゃね」

実夏は一応女の子ではあるが、こうゆうことは普通に言ってしまう。少しは照れたり、恥ずかしがったりするものだと思うのだが、実夏は全然気にしないらしい。

「そんなことより修二、部活とか決めたのか？」

一樹の口癖は「そんなことより」である。話の展開など気にせず、いつも気まぐれに話題を変えてしまうのだ。一樹の人柄ゆえ誰もツッコまないが、こいつ実はKYなんじゃないかとたまに思う。つまり一樹が今の話題に飽きたので、部活の話題へと変更された。

「いや。決めてないよ。特にやりたいこともないし、また帰宅部かな」

僕は運動神経が良くスポーツ万能なわけでもないのに、部活なんか真面目にやったことがない。

「それがさ、アクアリウム同好会ていうのがあってさ。何も決めてないなら一緒に入ろうぜ」

「アクアリウム？　なんだよそれ？」

「まあ簡単にいえば、水槽で魚を飼おうって訳だ」

まさかこいつ、今朝話していた巨人が人間を飼育しているとか、訳わかんない話まだ考えているのか。

「言っとくけど、いくら今の時代でも人間は飼えないし、それにお前が巨人にはなれないぞ」

2020年、ブラックホールの生成実験に成功した現在でも、水槽のなかに小さな宇宙を創りだし、自らが巨人になることなど無理に決まってる。

「わかってる。もうそれは諦めたよ。だから修二、俺とアクアリウムしようぜ」

というふうな、まあ悪くないと思いアクアリウム同好会に入ることにしたのだが…。

入学式から一週間が過ぎ、今日から高校生として初めての授業が始めるわけだが、僕は後ろの席の女生徒から背中を突かれ振り向いた。

「ねえ木山君」

普通にすれば、こいつ本当にかわいいな。

「どうした？」

「シャーペン貸して。持ってくるの忘れちゃって」

授業初日からシャーペン忘れるなど思ったが、まあ入学式の日に発言に比べればシャーペン貸してほしいなんてかわいいもんじゃないかと思い、僕は快く貸してあげることにした。

「はいよ」

「ありがとう。あ、あと消しゴム、それと教科書も貸して欲しいんだけど。とゆうかバグ持ってくるの忘れちゃって。なにも持ってきてないのよ」

前言撤回。こいつほんとにドジだ。かわいいなんて少しでも思った僕がバカだったよ。

「いや。でも忘れたのは仕方ないからな。全部貸してやるよ」

と言って授業の道具を全部貸して、それから財布も忘れた茉莉に昼飯までおごってしまったわけだ。言わば茉莉の奴隷と化した1日が終わったのだが。

「木山君、今日は色々ありがとう。一応お礼は言っておくわ。ところで部活とか入るの？」

聞こえてはいけない言葉だったのかもしれない。そのせいで、僕と一樹と茉莉はアクアリウム同好会の部室に向かっている。友達ができたのはいいことなのだけれど、これから先このドジっ子の面倒を見続けることになりそうだ。僕はこいつの保護者じゃない。

「ところで木山、お前アクアリウムなんて興味あったのか？」

「あ、あんたがどうしてもって言うから付いて来てあげたんでしょうが」

どうでもいいが、こいつは本当に素直じゃないな。

「それよりアクアリウムってなんなのよ？」

「要は水槽の中に宇宙をつ」

「それは違う！」

暴走しかけた一樹を止めた

木山（後書き）

あとがきあとあと

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6541/>

木山

2010年10月11日00時56分発行